

幕末維新时期大阪における私塾の一側面

——摂津国旧藩主の社会的活動周辺から見る泊園書院・懷徳堂・梅花社——

横 山 俊一郎

One aspect of “private academy” in Osaka, Hakuen Shoin, Kaitokudo, Baikasha, in the last days of the Tokugawa shogunate, and the Restoration period.

—The perspective on the social activities of the last feudal lords in Settsu province—

YOKOYAMA Shunichiro

This paper shows the aspects of human resource development institution of “private academy” in Japan like “Shoin” in China. Therefore we focus on the Kazoku that perform social activities in funding easily. As a concrete example, we take Sakurai (Matsudaira) Tadaoki (the last feudal lord of the Amagasaki clan) and Kuki Takayoshi (that of the Sanda clan) who had ruled the Settsu Province near Osaka. The Kazoku described above are considered to be affected by “private academy” in Osaka (Hakuen Shoin, Kaitokudo, Baikasha etc.).

For example, Tadaoki was a member of Hakuen Shoin.

Hakuen Shoin was the largest “private academy” in Osaka in the last days of the Tokugawa shogunate. We will notice Tadaoki carried out welfare activity by the incomparable idea in the Restoration period.

キーワード：泊園書院 懷徳堂 梅花社 櫻井（松平）忠興 九鬼隆義

はじめに

東アジア地域における伝統文化の形成に寄与してきたものの一つとして「書院」が考えられている。いわゆる「書院」とは、宋代以降の中国において発達した民間教育施設を指すことが一般的であるが、ここで言う「書院」とは、江戸時代における日本の「私塾」を同類の施設として想定しており、日本を含めた東アジア地域における伝統教養の形成との関わりから考察が試みられている¹⁾。しかしながら、こ

1) 吾妻重二「東アジアの書院について——研究の視角と展望」(『東アジア文化交渉研究』別冊2「東アジアにおける

れら一連の研究では、「書院」が果たした役割として、学問・教育の飛躍的向上という学術的側面を念頭に置いた考察がなされ、宋代の「書院」に見られる、士人の成長という実践的側面については、その考察が不十分であるように思われる²⁾。

この士人と呼称される宋代に成立した支配階層は、彼らの生き方の指針とされた「修身齐家治国平天下」という『大学』の章句や集権的王朝国家による科举制度の原理からして、地域社会の諸課題とは無縁の存在であったと想定されうる。しかしながら、宋代以後の歴史の展開を見ると、そうした想定とは矛盾する事態を示しており、むしろ士人と地域社会との関係は密接になっている³⁾。

こうした事実に加え、宋代以後の中国における「書院」の発達という事実と併せて検討すれば、民間の学問所とされる「書院」が士人の課題解決能力を高める役割を果たしていたという想定もありうるように思われる。そこで本稿では、こうした仮説を念頭に置きながら、日本における「書院」すなわち「私塾」の人材養成機関としての側面に接近することを試みる。しかしながら、史料上の制約があるため、その方法としては、複数の人物の言動を取り上げて、その問題点を幾らか指摘するに留めておく。

最後に、日本の「私塾」における人材養成機関としての側面を明らかにするにしても、その時期や場所を限定する必要が出てくるだろう。これに関しては、幕末維新期の大阪を設定したい。一般的にみて、幕末維新期における「私塾」と言えば、近代化に関する文脈の中で、慶應義塾に代表される西洋学術に根ざした蘭学塾が想起されがちなのではないだろうか⁴⁾。しかしながら、陸上および海上交通網が発展途上にあった幕末維新期では、大阪における「私塾」のあり方は、中央におけるそれとは異なる様相であったと考えられる。実際、儒学を標榜した泊園書院は幕末期において大阪最大の「私塾」となり得ており、その出身者は維新期において、現代にも通じる進歩的な活躍をも示している。これらの事実は、地方における儒学の一つの発展形態や変革期における「私塾」の存在意義を示しているように思われる⁵⁾。

書院研究」、関西大学文化交渉学研究拠点、2008年）参照。

- 2) 「書院」研究という立場から日本の「私塾」の役割を明らかにした業績として、その学術的側面については、湯浅邦弘「書院としての懐徳堂」（『東アジア文化交渉研究』別冊2「東アジアにおける書院研究」、関西大学文化交渉学研究拠点、2008年）が挙げられる。
- 3) 森正夫「宋代以後の士大夫と地域社会——問題点の模索——」（研究代表者谷川道雄『中国士大夫階級と地域社会との関係についての総合的研究』昭和57年度科学研究費補助金総合研究(A)研究成果報告書、1983年）参照。
- 4) 幕末維新期の蘭学塾については、当然、大阪における適塾の存在も注目すべき事項の一つであると思われるが、本稿では、幕末維新期をくぐり抜けて近代にまで存続する「私塾」の存在価値を問題意識としているため、民間教育施設という「私塾」本来の特徴を備えたまま、近代以降、大学組織にまで発展した慶應義塾を一つの目印として設定している。
- 5) 明治前期の漢学塾の隆盛とその社会的機能との関係について、その両者を繋ぐ一つの方法論を提起した業績として、澤井啓一「東アジアにおける日本漢学塾」（『東アジア文化交渉研究』別冊2「東アジアにおける書院研究」、関西大学文化交渉学研究拠点、2008年）が挙げられる。

1. 問題の所在

(1) 従来の華族資産研究について

本稿では、日本の「私塾」における人材養成機関としての側面を明らかにすることを目的としている。そこで考察する中心人物として、明治4（1871）年7月の廃藩置県以後における華族層を設定したい。彼らは共通して、廃藩置県以前には、藩政における政策決定過程を担った経験を有しており、廃藩置県以後になると、維新政府による家禄保障のもと、資産家としての一面を持つようになる。これら2つの特徴からして、彼らは他の階層と比較して特異な存在であったと推測され得る。しかしながら、廃藩置県を境として資産家となるに至ったことに加えて、旧領地定住の必要がなくなった以上、それが現実的課題解決の行動を伴うかどうかはまた別として、そこに彼らの投資もしくは寄付の内容如何という実践的問題が発生するのではないだろうか。

しかしながら、これまでの華族資産に関する先行研究をみれば、その多くは独占資本主義の原初的蓄積段階の事例として、当時の政商と併せて取り上げられている⁶⁾。したがって、彼らの投資もしくは寄付行動の背後にある知的もしくは道徳的実践性に関する考察は未だ不十分であると思われる。仮に彼らが新時代に対応した知的もしくは道徳的実践性を有していたとして、それに政策者としての経験に加え、投資もしくは寄付の機会に恵まれた資産家としての地位を与えられていたならば、そうした実践性をいち早く実地に移しえただろう。そうした意味では、他の階層と比較して、彼らの実践性に着目する意義は大きいと考えられる。

(2) 摂津国旧藩主による社会的活動の異同

次に、具体的な考察手法を設定したい。そこで本稿では、彼らの知的・道徳的実践性を培った経緯をより重層的に捉えることを目指して、旧領地が近接する旧藩主2名を取り上げ、彼らの投資もしくは寄付を伴う社会的活動を併せて考察することとする。彼らの知的・道徳的実践性を培う教育機関として「藩校」とは異なる「私塾」を考えた場合、そこへ如何にしてアクセスするかは、彼らの居住する地理的条件に最も制約されやすい。したがって、旧領地の具体的所在地として、幕末維新时期大阪における「私塾」のあり方の把握を踏まえ、旧国名の摂津国を当てることとする。

以下2名は、摂津国旧藩主のうち、とりわけ廃藩置県以後に目立つ活動をした人物である。

〔I〕旧尼崎藩主櫻井（松平）忠興 弘化5=1848～明治28=1895

忠興は弘化5年1月8日、第6代尼崎藩主櫻井（松平）忠榮の七男として生まれた⁷⁾。生母は継室の丹

6) 華族資産に関する代表的な業績として、千田稔「華族資本の成立・展開———一般的考察———」（『社会経済史学』52巻5号、1986年）が挙げられる。

7) 忠興の地位・役職および事蹟については、その大体が判る著書・資料として、工藤寛正編「松平忠興」『徳川・松平一族の事典』（東京堂出版、2009年）480頁、吾妻重二「松平忠興」『泊園書院歴史資料集——泊園書院資料集成1——』（関西大学東西学術研究所、2010年）373頁、「履歴書」『子爵故櫻井忠興 日本赤十字社ニ関スル事蹟畧記・履歴書』（尼崎市立中央図書館蔵）があり、その個別のものが判る著書・資料として、日赤中央女子短大史研究会編『日本赤十字看護教育のあゆみ』（蒼生書房、1988年）21頁「博愛幼稚園百年のあゆみ」『博愛』（尼崎市立博愛幼稚

後国宮津藩主本庄（松平）宗発の娘である。後に嫡子となり、文久元（1861）年、父忠栄の隠居によって家督を相続する。正室に信濃国松本藩主戸田（松平）光則の娘を迎えている。

文久3（1863）年、京・大坂において不穏な情勢になると、領内の警備を固めて農兵制を採用し、鉄砲の調練を積んで砲台を5ヶ所築造する。同年に泊園書院の藤澤東咳が尼崎藩の賓師に就任する。元治元（1864）年、禁門の変に際し、伊丹・西宮一帯を警備し、長州征伐には幕府に積極的に参戦を申し出る。慶應4（1868）年、鳥羽伏見の戦いが開始されると同時に、新政府側に恭順することを示す。同年に、姓を本来の櫻井姓に改める旨を新政府に届け出る。明治2（1869）年、尼崎藩知事の就任に際し、「汝らは王土の民なり、我は勅命を奉じてこれを治むるものなり」との布告を出す。同年に東咳の門下中谷雲漢が尼崎藩の藩校正業館の督学に就任する。同4（1871）年、藩内の風水害に際し、義捐金の提供等の救援活動を行う。その後、城詰米を災害後の救援に当てることを新政府に出願する（結果、受け入れられず）。

廃藩置県以後——教導職の就任と慈善家としての活動

明治8（1875）年、大和国大神神社大宮司兼権少教正に任じられる。同10（1877）年2月に西南戦争が勃発し、佐野常民と大給恒（改名前は松平乗謨）らとともに救恤団体「博愛社」の創設に尽力する。松平一族の松平信正・松平乗承兩人に入社を勧誘され、家令を介して直ちに入社を決意する。金千円を寄付すると同時に、富士見町の邸宅の一部を仮事務所として提供する。同年7月、同社の委員に就任し、司計を担当する。同年8月、戦地での実地救援を目的として、寄付金・薬品・機材を携えて出発する。同11月、長崎および熊本支局での活動を終えて帰京する。同11（1878）年、新たな社則によって幹事に就任する。同17（1884）年に子爵を授けられる。皇居炎上に際し金千円献上に付き、銀盃一組を下賜される。尼崎港修造費として金三百円寄付に付き、木盃一組を下賜される。同20（1887）年5月、博愛社の発展的解消によって日本赤十字社が発足し、常議員および理事員に就任する。同21（1888）年、同社から有功章を授与される。同22（1889）年6月、最初の「日本赤十字社看護婦養成規則」が制定され、同12月に看護婦養成委員に就任する。同23（1890）年、貴族院議員となる。同年に忠興らの寄付によって、醤油醸造業者大塚万次郎が櫻井神社境内に「博愛幼稚園」を開設する。同28年4月29日、西宮の別邸にて48歳で没する。同34（1901）年、忠興の博愛社設立を顕彰する記念碑が櫻井神社境内に建てられる。東咳の子で雲漢に学んだ藤澤南岳、これに撰する。

〔Ⅱ〕旧三田藩主九鬼隆義 天保8=1837～明治24=1891

隆義は天保8年4月5日、第9代丹波国綾部藩主九鬼隆都の三男として生まれた⁸⁾。実父隆都は、佐藤

園創立百周年記念事業実行委員会、1990年）12頁、田中敦「櫻井氏と尼崎」（『みちしるべ』第30号、尼崎郷土史研究会、2002年）22頁～32頁、「日本赤十字社沿革史 全」（『明治後期産業発達資料』第672巻、龍溪書舎、2003年）295頁～296頁が挙げられる。

8) 隆義の地位・役職および事蹟については、高田氏による九鬼家主従の研究での記述が最も詳しく、その代表的論文として、高田義久「最後の藩主九鬼隆義とその時代」（『歴史と神戸』第49巻4号、神戸史学会、2010年）、その代表的資料として、高田義久編『三田藩 九鬼家年譜』（限定版 三田市立図書館蔵、1999年）290～325頁が挙げられる。その他、隆義と福澤との書簡の往復については、小室正紀「書簡に見る福澤人物誌 第22回 九鬼隆義・白洲退蔵・沢茂吉——開明派旧藩主とその周辺」（『三田評論』No.1088、慶應義塾、2006年）が最も詳しい。

信淵を招いて藩政改革を行なっている。安政6（1859）年、第12代三田藩主九鬼精隆の死によってその養子となる。

万延元（1860）年、三田に初めて入封する。同年に三田藩儒者白洲退蔵は軍制改革を建議し、翌年に新様式の鉄砲調練の戦闘法が採用される。慶應元（1865）年、人事刷新として白洲を藩政の執政とし、南郷の郷方小寺泰次郎を抜擢して藩財政を担当させる。同3（1867）年、江戸にて大政奉還に反発を示す。白洲東上して隆義を説得し帰藩させる。同4（1868）年、新政府側に帰順の意向を伝える。明治2（1869）年、福澤諭吉が隆義のもとに書簡を送る（福澤との交流が確認できる最初の資料）。同4（1871）年、拳藩帰農計画を建て、藩知事以下の家禄5年分の資金貸付を新政府に出願する。同年に帰田仕法として、郡県制樹立の急務、家禄制度の全廃、華士族呼称の廃止を掲げる。

廃藩置県以後——キリスト教洗礼と実業家としての活動

明治5（1872）年、宣教師デーヴィスとの家族間の親交を始める。同年に神戸へ移住する。同6（1873）年、白洲・小寺らとともに、輸入商社「志摩三商会」を神戸栄町に開業する。同年に長女肇の死に際し、デーヴィスの司式によってその葬儀をキリスト教式で行う。同8（1875）年、隆義らの寄付によって、一般子女を対象とする女学校「神戸ホーム」が正式に開校する。神戸女学院大学の前身である。同年に旧三田藩士鈴木清らによる開拓結社「赤心社」の第1回株主総会において、白洲とともにその委員に選出される。同13（1880）年、慶應義塾の経営危機に際し、福澤から寄付金の依頼を受ける。同16（1883）年、東京へ移住する（後に再び神戸へ移住する）。同17（1884）年に子爵を授けられる。同20（1887）年、神戸教会でキリスト教の洗礼を受ける。同22（1889）年、慶應義塾の大学部開設に際し、福澤から寄付金の依頼を受ける。同24年1月24日、神戸にて55歳で没する。

〔Ⅲ〕 忠興と隆義

忠興が明治8（1875）年に就任した教導職とは、同3（1870）年の大教宣布を背景として、同5（1872）年に設置された教部省が定めた、神道・仏教・儒教を折衷した教則三条によって組織された役職である⁹⁾。こうした役職を媒介とした明治初年の新政府の一連の宗教政策は、維新期の開国和親政策による対外関係の緊迫のなかで、キリスト教の影響力に対する強い不安や恐怖の反映であった¹⁰⁾。しかしながら、その一方で、隆義が同5（1872）年において宣教師デーヴィスとの家族間の親交を始めるところからして、忠興と隆義における宗教観は対照的であったと考えられる。

次に、両者の社会的活動を見ていくと、その教育レベルに高低の差はあるものの、何れかの教育機関の設立・維持の寄付という点では共通している。しかしながら、両者の社会的活動を考察するに当たって、とりわけ注目すべきなのは、諸外国との関係に関連する分野における投資もしくは寄付であるように思われる。なぜなら、明治初年に新政府によって採られた殖産興業政策にも見られるように、社会経済史的観点に立てば、当時の日本の国家的課題は、欧米の近代工業先進国による植民地化から如何にして回

9) 忠興の教導職就任から退任にかけての経過は、『子爵故櫻井忠興 日本赤十字社ニ関スル事蹟畧記・履歴書』（尼崎市立中央図書館蔵）のうち「履歴書」によれば、①明治8年1月15日付で「任大神神社大宮司兼権少教正」、②明治9年6月17日付で「兼補少教正」、③明治10年6月16日付で「依願免本官専補少教正」、④明治11年7月8日付で「依願免少教正」となっている。

10) 安丸良夫『神々の明治維新——神仏分離と廃仏毀釈——』（岩波新書、2007年）4頁。

避するか、というものであり、そうした課題への解決策として、少なくとも新政府の政策者レベルでは、国際関係に配慮しつつ、貿易立国によって国家の独立を保つ必要を感じていたと考えられるからである¹¹⁾。忠興と隆義が採った社会的活動の内容は、こうした政策担当者の一般的動向と無縁ではないだろう。

(3) 大阪における泊園書院と慶應義塾——明治6年の開業を基点として

では、近代工業先進国との接触を契機として、一藩レベルから国家レベルへと飛躍したそうした課題に対して、投資もしくは寄付を伴いながら、その解決を志向した人物において、知的もしくは道徳的実践性が貢献したのか・しなかったのか、もし貢献したとすれば、それは如何なる教育機関によって培われたのか、という次の問題が考えられるだろう。これらの問題に対して、そもそも、忠興の博愛社周辺〔国際関係に関連する分野に相当〕に関する学術研究は皆無であり¹²⁾、隆義の志摩三商会周辺〔貿易立国に関連する分野に相当〕に関する先行研究では、福澤との個人的関係もしくはピューリタニズムの受容との関わりから論じられるものであり¹³⁾、幕末維新时期大阪における「私塾」との関わりからは論じられていない。こうした研究状況は、両者の社会的活動を地域の学術との関わりから位置づける作業が未だ行なわれていないことを意味し、たとえ隆義の事例では個別研究が幾つかあるにしても、その成果はやや平面的な視点に基づいているとの印象を受けてしまう。

そこで、明治6（1873）年10月11日に福澤から隆義・白洲に宛てた書簡の一節を取り上げ、当時の大阪における「私塾」の動向の一端を幾つか提示する。そして、それらの事実をメルクマールとして分析を進めていきたい。

福澤は、そこで、次のように述べている。

此度社中庄田平五郎、名兒耶六都兩人、大坂へ出張、慶應義塾之出店開業之積ニ御座候。上方之事ハ不案内、今より事柄ハ難計候得共、種々御相談申上候義も可有御座、可然御応援奉願候¹⁴⁾

文明開化を目指す新政府の方針が明確になるに従って、世の洋学熱が高まり、福澤およびその社中は、単に東京に居て全国から若者が上京来学するのを待つのではなく、積極的に地方に進出し、分塾を設けて英学による文明開化を全国に広めようとしたのである。そこで、大阪に分塾を開くことが計画され、

11) 藤原昭夫「殖産興業の経済思想——大久保利通と地方官僚」（杉原四郎・逆井孝仁・藤原昭夫・藤井隆至編『日本の経済思想四百年』日本経済評論社、1990年）参照。

12) 学術研究書ではないが、片島幸雄編『博愛社誕生——最後の尼崎藩主 櫻井忠興——』（日本赤十字社兵庫県支部支部創立百周年記念事業委員会、1988年）は、忠興の博愛社関係の資料を収集・整備している。

13) 明治期の隆義の活動に関連する研究として、川崎喜久子「三田藩とピューリタニズム」（『関東学院文学部紀要』第42号、関東学院人文学会、1984年）、小室正紀「書簡に見る福澤人物誌 第22回 九鬼隆義・白洲退蔵・沢茂吉——開明派旧藩主とその周辺」（『三田評論』No.1088、慶應義塾、2006年）、高田義久「最後の藩主九鬼隆義とその時代」（『歴史と神戸』第49巻4号、神戸史学会、2010年）等が挙げられる。

14) 書簡番号152 慶應義塾編『福澤論吉書簡集 第一巻』（岩波書店、2001年）276頁。

当時神戸に居住していた隆義・白洲に「応援」を願い出たのである。こうして、同11月に安堂寺橋通三丁目の丸屋善蔵の扣屋敷（後に北浜町二丁目小寺篤兵衛方に移転）に開校したのが、「大阪慶應義塾」である。しかしながら、この分塾は、予期した程の反響を生まず、1年半程で撤退せざるを得なくなっている¹⁵⁾。

一方、明治6（1873）年において「私塾」を開業したのは、慶應義塾だけではなかった。その年初において、南岳は船場唐物町八百屋町南へ入る西側（唐物町二丁目）に泊園書院を再興している。南岳はそれ以前には在府していたのであるが、新政府の方針と合わず、大阪に戻って「私塾」を再興したのである。ちなみに、泊園書院の特色の一つとして、5つの段階に分けられる「波乱に富んだ歴史」が指摘されているが、明治6（1873）年は、そのうちの第3期の始まりの年に相当する¹⁶⁾。

それでは、泊園書院の歴史の中で、第3期〔明治6（1873）年～大正9（1920）年〕とは如何なる時期であったのだろうか。

大阪にもどった南岳によって泊園書院が再興され、最も隆盛を見た時期である。鴻儒南岳の名声と学問、人徳によって、畿内をはじめ全国から学生が雲集し、政界・官界・法曹界・実業界・教育・ジャーナリズム・学術・文芸などの各界にすぐれた人材を輩出している。いわば近代日本の発展に大きく寄与したのである。壮年期の黄鵠・黄坡も南岳を支え、泊園書院は黄金時代を迎えた¹⁷⁾。

したがって、大阪における慶應義塾と泊園書院は、その開業年が共通していたにも関わらず、その後の経営状況において対照的なトレンドを示していたといえる。こうした事実は、幕末維新时期における大阪の「私塾」のあり方を一面において象徴していると考えられ、先に指摘した先行研究上の不足を埋める意義は大きいように思われる。

2. 泊園書院における忠興の位置づけ

本章では、前章で述べた本稿の問題を踏まえて、泊園書院の歴史において、忠興が如何なる世代に属し、それゆえ、如何なる人物であるのか、について確認したい。それに加えて、先行研究において、その社会的活動を泊園書院との関係から考察が試みられた同門の松岡康毅についても幾らか指摘したい。

（1）最後の近世的教養人

前章で述べた5つの段階に分けられる泊園書院の歴史の中で、忠興は第1期に相当する時期において門下生となっている。

それでは、泊園書院の歴史の中で、第1期〔文政8（1825）年～慶応4（1868）年〕とは如何なる時

15) 補注（こと）9 慶應義塾編『福澤諭吉書簡集 第一巻』（岩波書店、2001年）385頁。

16) 吾妻重二『泊園書院歴史資料集——泊園書院資料集成1』（関西大学東西学術研究所、2010年）537頁。

17) 吾妻重二『泊園書院歴史資料集——泊園書院資料集成1』（関西大学東西学術研究所、2010年）538頁。

期であったのだろう。

東咳による泊園塾の開設と発展、そして幕末の南岳による継承時期である。この時期、泊園書院は大坂における徂徠学派の中心として儒学と文芸の発展に寄与するとともに、幕末期に至って勤皇の志士を数多く輩出した¹⁸⁾。

したがって、院主として東咳もしくは南岳が考えられる時期である。忠興については、文久3（1863）年7月17日、それ以前に尼崎藩儒官となっていた中谷雲漢を介して東咳が賓師として聘せられている。

そこで、吾妻氏による「泊園人物列伝」所載の人物のうち、第1期生かつ東咳門下（交友・親類関係を除く）であった人物を抽出したところ、合計して19名が数えられた¹⁹⁾。次に、この人々を便宜的に、「ブレ天保世代（9名）」「天保世代（6名）」「ポスト天保世代（4名）」の3つの世代に分類した。これは、経済思想史分野において、人生の中で幕末維新期が最も活動的であった人々を天保期（1830～44年）生まれの人々に求める分類法であり、それぞれの世代において直面する課題が異なっていたと考えられている²⁰⁾。

以下、それら世代ごとに見られた主な特徴と代表的な人物を述べておく。

〔a〕ブレ天保世代…医者、官僚が多い

この世代の特徴は、著名な医師や維新後に官僚となる人物が多く見られることである。

代表的人物として、漢方医学によって一大医門をなした田中華城、外科医術で有名な華岡積軒・青洋、藩校講師から藩の財政を担当し、明治期にも出石藩政の中樞にいた堀田省軒、東咳の推挙により尼崎藩の儒官を務め、東咳没後には南岳を教導した中谷雲漢がいる。また、忠興と同様、藩主でありながら東咳の教えを受けた但馬国豊岡藩主京極高厚がいることを注目すべきである。

〔b〕天保世代…開拓者が多い 海外居住者はそこで教育活動に従事

この世代の特徴は、開拓者精神に富んだ人物が多く見られることである。

代表的人物として、東京日日新聞の主筆として活躍した後、中国各地に病院を設けた同仁会や、上海の東亜同文書院を設立した岸田吟香、前半生は樺太探検と北海道開拓に取り組み、後半生は台湾総督府国語学校教授、私立神田中学校校長となり、斯文会初代書記ともなった岡本韋庵、北海道開拓使を経て岡山県勝北郡長となり、（日本原）津山市の開拓に業績を挙げた安達清風がいる。

18) 吾妻重二『泊園書院歴史資料集——泊園書院資料集成1』（関西大学東西学術研究所、2010年）538頁。

19) 「泊園人物列伝」は、吾妻重二『泊園書院歴史資料集——泊園書院資料集成1』（関西大学東西学術研究所、2010年）363頁～384頁に、泊園書院出身者および交友のうち、著名な人物計69名を挙げている。

20) 川口浩編『日本の経済思想世界——「十九世紀」の企業者・政策者・知識人——』（日本経済評論社、2004年）14頁。

〔c〕 ポスト天保世代…官僚から政治家へ転身 国務大臣を歴任 国際分野での活躍

この世代の特徴は、官僚から政治家へ転身して国務大臣となる等、国家的な意思決定に深く関与している人物が多く見られることである。忠興はこの世代に属している。

代表的人物として、駐米公使、農商務大臣等を歴任、第2次伊藤博文内閣の外務大臣となり、「陸奥外交」と呼ばれる大きな成果を挙げた陸奥宗光、東京控訴院院長、検事総長等を歴任、第1次西園寺内閣の農商務大臣として政界で活躍した松岡康毅がいる。また、忠興と違って、西南戦争で西郷軍に加わり斬罪となった坂田諸潔がいることも注目すべきである。

まず、これら世代ごとの特徴や人物を検討する前に、忠興の出生年に着目すれば、第1期生かつ東暎門下生の中で、最も年齢が若いことに気づく。ちなみに、ここで挙げた人々は、近代教育を全く受けたことがない。一方で、これらの人々より若い世代、すなわち第3期生ともなると、近代学校制度の中で学んでいる²¹⁾。したがって、忠興は、大阪の泊園書院（注：泊園書院の第2期の所在地は讃岐高松）において、近代教育を受けていない最後の世代に属する人物であったといえる。

次に、忠興が属する「ポスト天保世代」の特徴としては、最終的に国務大臣を歴任する等、国家的な意思決定に深く関与していることを指摘することができる。そのうち、国務大臣に就いた経歴を持つ陸奥や松岡は、それ以前において外国での教育や生活を経験している。したがって、忠興は、西南戦争において西郷軍に加わった坂田諸潔と併せて、国際分野での活躍が見られる「ポスト天保世代」に属しながら、その教育面では「近代的」側面に乏しい人物であった（しかしながら、この両者が西南戦争において活躍する舞台は全く異なるものであった）。

しかしながら、注意すべきなのは、忠興は、出生年では「ポスト天保世代」に属するものの、その生まれは旧藩主の家であり、陸奥と松岡とは出世過程が異なる特別な立場にあったということである。したがって、彼が活動的であった時期をみれば、出生年を基準とした「ポスト天保世代」が活動的であったとする明治後期とは異なり、「天保世代」が活動的であったとされる幕末維新时期においてである。

（2） 同門松岡康毅に見る知的・道徳的実践性

次に、忠興と同じく文久3（1863）年に東暎の門下生となり、その出生年が忠興の2年だけ早い松岡康毅について幾らか指摘したい。

松岡は、阿波（徳島県）の農民の子であり、東暎に入門、後に南岳に指導を受けた。維新後、司法大書記官、東京控訴院長、検事総長等を歴任した。また、貴族院議員、第一次西園寺内閣の農商務大臣として政界でも大いに活躍した。日本大学の初代学長でもある。

松岡の思想は、現代にも通じる進歩的側面があることを従来から指摘されており、それは、儒学の素養の上に成り立っているのか、それとも儒学を捨て去った結果なのかという問題がある。末澤氏は、その問題の解決を目指して、松岡の経歴と、そこで出された意見書を検討しているが、そこでは、松岡が

21) 例えば、第3期生のうち、その出生年が比較的早い世代に位置する山田喜之助（中央大学の前身英吉利法律学校の設立者の一人）の場合、上京し、明治15（1882）年には東京大学法科大学を卒業している。

東咳に直接指導を受けたのは約1年位であって、残りの期間は南岳に指導を受けたとしており、南岳の思想とその後の両者の交流状況から松岡における儒学の影響を検討している²²⁾。

こうした松岡における師弟関係の移行は、松岡と同様に「ポスト天保世代」に属しつつ、その出生年が松岡に接近している忠興においても同様であったかもしれない。実際、忠興は東咳亡き明治期において、南岳と何らかの関係があったものと推測される。

以下、それを示唆する櫻井神社境内に建つ碑石の全文である。

記念碑

此碑為明治二十七八年役建也以吊死 王車者兼及櫻井忠興命亡博愛社之成命為社之成命為之委員社後称赤十字社故使後人不忘其恩而已久保松照映天性忠愛与同志謀釀金建此碑々成而照映亦既卒可悲哉余与照映相識乃為諸君請誌以不朽之亡爾

明治三十四年一月

南岳藤澤恒撰

正六位勳四等 大邨屯書²³⁾

先に述べた末澤氏は断片的資料から、少なくとも松岡は南岳と良好な交流を結んでいるとし、続いて、南岳の影響が端的に現れている松岡の「教育に関する意見」を取り上げている。そして、少なくとも教育論においては南岳の言葉を出してはいないが、その主張において影響を受けている、として結論づけている。

以下、考察を終えた末澤氏における総括である。

以上のように松岡康毅にみる儒学の影響について若干の検討を行った。そこでは、少なくとも松岡の根底には儒学、中でも藤澤南岳の教えが流れていることがわかった。しかし、近代的と評される立法関係、特に旧民法草案に関するものなどには全く触れていない。そこで、松岡が儒学の基礎の上に近代的自然法論を受容していったか否かについては、まだ判然としない²⁴⁾。

つまり、末澤氏は、松岡を考察するに際して、その動機の出発点をなしていた、松岡の持つ進歩的思想は、儒学の素養の上に成り立っているのか、それとも儒学を捨て去った結果なのかという問題は、その根本的解決に至れなかったといえる。しかしながら、末澤氏によれば、南岳における「道」の具体化を目的とした「三事」、すなわち「正徳・利用・厚生」の主張が、松岡による「教育に関する意見」との一致が明らかになった以上、いわゆる近代的主張との関わりは無かったにせよ、松岡における知的もしくは道徳的実践性的一端が認められたといえる。

22) 末澤国彦「松岡康毅にみる儒学の影響についての一考察——藤澤南岳との関係から——」（『日本大学精神文化研究所紀要』、日本大学精神文化研究所、2000年）

23) 尼崎市役所編『尼崎志 第二篇』（名著出版、1974年）238頁～239頁。

24) 末澤国彦「松岡康毅にみる儒学の影響についての一考察——藤澤南岳との関係から——」（『日本大学精神文化研究所紀要』、日本大学精神文化研究所、2000年）

3. 博愛社設立前後の忠興の行動とそれに対する評価

本章では、忠興が泊園書院における最後の近世的教養人であったことを確認したうえで、忠興と同世代の松岡に見られた知的もしくは道徳的実践性に関し、松岡におけるそれと比較してより実践性が認められる事例として、博愛社設立前後における忠興の行動を取り上げる。しかしながら、ただ単に忠興本人の行動を追うだけでは、その行動が持つ当時の実際の価値を担保できないように考えられる。したがって、忠興の行動と併せて、それに対する他者からの評価を見ていく必要があるだろう。

まず初めに、明治10（1877）年における博愛社入社当時の忠興の行動を見てみよう。

明治十年六月中旬博愛社設立ノ件官許ヲ得タル旨在長崎佐野議官常民ヨリ在東京大給議官恒ニ通報アリシカバ大給議官ハ同志者ナル松平信正・松平乗承（此ノ二人ハ先ニ両議官ガ本社設立ノ件ヲ政府ニ申請セシ当時ヨリノ同志者ナリ）ニ先ヅ我一族ノ人々ニ入社ヲ勧誘セシムコト依頼セリ乃チ信正・乗承二人ハ我一族ヲ歴訪シー日櫻井忠興子爵ヲ富士見町ノ邸ニ訪ヒシニ子爵ハ当時三輪神社ノ官司トシテ某地方ニ在勤セラレシカバ留守ノ家令高塚友義ニ此事ヲ語ル高塚ハ頓テ之ヲ子爵ノ許ニ申入レシニ子爵ハ大ニ此挙ヲ賛成セラレ直チニ入社シテ金壹千円ヲ寄付セラレ尚ホ富士見町ノ邸ノ一部ヲ本社ノ仮事務所ニ供セラレタリ。次デ我一族ノ諸君モ尽ク入社セラル、カクテ子爵ハ七月ノ初神職ヲ辞シテ帰京セラレ直チニ社務ニ従事セラレタリ²⁵⁾

忠興の博愛社入社は、いわゆる後発組の立場からであった。それにも関わらず、金千円を寄付するだけでなく、自分の邸宅の一部まで提供していることは注目すべきことであるだろう。また、ここで言う神職とは、大教宣布に起源を持つ教導職を指している。国家の宗教政策の一翼を担う役職を任期途中で辞職願をしてまで入社を決意したのは、忠興の内面に熱い何かがあったからだと推測される。

こうした忠興の行動に対して、上司である大給恒（改名前は松平乗謨）は、次のように評価している。

この櫻井忠興といふ人ハ元撰州尼ヶ崎の城主四万八千石の大名で後子爵に叙せられたが、矢張私の一族中の華族で、今度の企てを聞くや其頃まで勤めてゐた撰州某神社の官司を辞し遥々上京して来て、博愛社創立の事に力を尽したいと言って、奇特にも富士見町の今招魂社が建って居る処ろに在った自分の屋敷を博愛社に寄付し、座敷から客間まで社の事務所に宛てた、是ハ丁度宗教家が自分の家を寺とすべく喜捨したやうなものである²⁶⁾。

大給は、忠興による邸宅の一部の提供に対し、その行動を「奇特にも」と修飾しているように、特に優れて珍しいことであったと評している。しかも、そうした一連の行動を総括して「宗教家」による「喜捨」行為と譬えているのは、当時の忠興の行動全般において知的もしくは道徳的実践性が見られたこと

25) 「松平乗承子手控抄写」『子爵故櫻井忠興 日本赤十字社ニ関スル事蹟畧記・履歴書』（尼崎市立中央図書館蔵）

26) 「日本赤十字社創立の由来」（明治35年10月28日付読売新聞所載）○これは副社長子爵大給恒氏の談である。

を示唆しているかもしれない。

続いて、博愛社入社の後、忠興が西南戦争において戦傷者の実地救援に携わった際、博愛社側から出された辞令書を見てみよう。

八月十五日社員櫻井忠興外六名社則附言第六条ノ主旨ヲ施行センガ為寄付集金貳千百余円及薬品器械ヲ携へ戦地へ派出ス其委託状左ノ如シ

櫻井忠興へノ辞令書

今度社員総代トシテ戦地ニ派出有之候ニ付テハ陸海軍病院ヲ巡訪シテ懇々創者患者ヲ慰問シ又本社ヨリ医員看護手等派遣ノ地ニ於テハ其施治ノ模様及社員ノ勤怠等ヲ視察シ都テ願書及社則并其附言ノ旨趣ニ基キ本社忠愛ノ主旨一際行届候様委員并医師ト精々協議勉行可有之候也

明治十年八月十五日

博愛社 印

櫻井忠興殿²⁷⁾

忠興は博愛社の社員総代として、戦地における救援活動の統括者を任されたのである。

こうした忠興の行動に対して、大給は、次のように評価している。

扱金も三四千円集ったので、此上ハ実地救護に出掛ける相談になったが、佐野と私ハ公用を帯びて居るから思ふに任せぬと思つて居ると彼の櫻井忠興ハ自ら進んで病院設立の経営から患者の救護の仕事に当ろうと言ひ出し、櫻井ハ遂に其の旧家臣高塚友義とそれから芸州の人で原田隆造といふのを連れて長崎へと出張した²⁸⁾。

忠興は、自ら進んで病院の経営および患者の救護に当たったのである。つまり、先の辞令書からは博愛社側からの組織命令であるかの印象を受けるが、実際はそうではなく、そうした役回りに忠興自ら買って出たのである。

ちなみに、博愛社は、それ以前において、救護の着手当時は軍団病院などへ救護員を派遣していたが、資金の増加に従い、社則附言に第六条を加えて、戦地に大小の綱帯所や仮設病院などを建てて事業の拡張に尽力することを明らかにしていた。

以下、そうした実践活動に関して、別紙において具体的に辞令したものである。

同氏へノ別紙

此度戦地着到ノ上ハ社則附言第六条ノ主旨実践可致見込ニ付宜シク先ツ軍団軍医長ニ稟議シ総督本営ノ聞届ヲ経又鹿児島県令ニ照会シ同県下適宜ノ地ニ於テ綱帯所及仮設病院等ヲ建置シ当分ノ内該所ニ駐在シ其医務ノ如キハ医師ノ所見ヲ採リ其他一般ノ事務部署ノ儀ハ委員心得原田隆造ト協議ノ

27) 「日本赤十字社沿革史 全」(『明治後期産業発達資料』第672巻、龍溪書舎、2003年) 294頁～295頁。

28) 「日本赤十字社創立の由来」(明治35年10月29日付読売新聞所載) ○これは副社長子爵大給恒氏の談である。

上勉テ救済ノ業ヲ拡張シ本社忠愛ノ主旨精々貫徹候様励精可有之候也

明治十年八月十五日

博愛社 印

櫻井忠興殿²⁹⁾

軍および地方政府に対して、自らの活動の主旨を伝達し、その後、戦地に駐在しながら、医務と事務の双方の部署の調整することが求められたのである。そして、それは、戦地における救済事業を拡張することを目的としたものであった。

こうした忠興の行動に対して、大給は、次のように評価している。

元来人間世界の事ハ跡から考へて見れば誰にでも出来る事のやうに思はれるが、所謂言ふハ易く行ふハ難しで、実地局に当って責任を帯びて遣る仕事ハなかなかそう思ふやうにハ行き兼ねるものである。

櫻井ハ謂はゞ殿様格の人でありながら、困難を顧みず戦地に臨んで病院を創立しやうといふといふのハ、盲蛇物におちずの形で向ふ見ずと言って良いか、胆力があつたといつて良いかハ知らぬが、兎に角傷病者ハ日々なかなか多く、殊にコレラが蔓延して、到る所流行するといふ厭な処へ出掛け病院の事務を引受け、医者を雇ふて傷病者に治療を受けさせ、仕馴れぬ仕事に従事して兎も角も成功したのハ、至極褒むべき事だ夫れも櫻井本人に大野心でもあつたなら格別、実に正直律儀一辺の殿様で、人の厭やがる所へ行つて責任を帯びて人の厭やがる仕事を仕遂げた丈ハエライもので、赤十字社員たるものハ決して櫻井の功を忘れてハならぬ、櫻井ハ誠に赤十字社の働きを實にした人である³⁰⁾。

大給は、忠興に向けた人物評価として「赤十字社の働きを實にした人」と結んでいるように、自ら立ち上げた救恤団体を実践的組織へ転化させた人物として称えている。そして、それは忠興が「人の厭やがる所へ行つて責任を帯びて人の厭やがる仕事」を成し遂げることによって実現されたのである。傷病者が日々運ばれてくることに加え、コレラが到る所で蔓延・流行している環境の下では、大給が「言ふハ易く行ふハ難し」と指摘するように、理念的には、病院の経営および患者の救護の必要性を理解できたとしても、それを「実地局に当って責任を帯びて遣る仕事」として実践行動に移すことはそう簡単にはいかないのだろう。

以上の大給の人物評からは、当時の忠興に何らかの自発的意思があつたことが想像される。しかしながら、大給は、忠興の行動の背後にある性格分析として、「本人に大野心でもあつたなら格別、実に正直律儀一辺の殿様」と述べているように、そうした自発的意思を持つに至った背景は、利害打算とは縁のないものであつたと推測される。

29) 「日本赤十字社沿革史 全」(『明治後期産業発達資料』第672巻、龍溪書舎、2003年) 295頁～296頁。

30) 「日本赤十字社創立の由来」(明治35年10月29日付読売新聞所載) ○これは副社長子爵大給恒氏の談である。

4. 九鬼家ブレーン白洲退蔵——文久期の郷方制改革を起点として

本章では、第1章で述べた本稿の問題を踏まえ、隆義の志摩三商会周辺に関して、先行研究に見られるように、福澤との個人的関係もしくはピューリタニズムの受容との関わりからではなく、旧藩時代からの重臣であり廃藩後は隆義の家宰的な役割を担っていた白洲退蔵という人物を介して論じたい。後章で詳述するように、この白洲という人物に注目すれば、隆義の志摩三商会周辺は、必ずしも幕末維新时期大阪における「私塾」の動向と無縁ではなかったことに気付く。

(1) 福澤書簡から見る白洲の位置づけ

まず初めに、志摩三商会における資産形成および運用に対して、福澤は如何なる評価を持っていたのかを確認したい。明治22(1889)年11月25日に福澤から白洲に宛てた書簡の一節から、志摩三商会における白洲のおおよその立場が推測できる。ちなみに、明治22(1889)年とは、隆義が死去する2年前の年である。

書簡の内容は、福澤が、隆義の資産運用について、同人へ忠告する約束を果たせなかったことを白洲に詫げる、というものである。

先年小生が存付候処ニ而も、其辺之意味毎々御話致し候事も有之、況んや〔1〕近来財産も次第ニ増殖し、家事ハ次第ニ多端、今後長く深切ニ之を視る物ハ誰そ、先生之外ニ其人なきハ分り切ったる事なり。況んや〔2〕今之財産ニて、其本源ニ遡りて由来を尋れば、先生ニあらずして誰そや。斯くまでニ明白なることなれば、小生ニ於て之を説くこと最も易し。何れ其中好機会可有之、御遠慮なく颯々と弁論可致存候。又承れば〔3〕近来ハ旧痾再発、製塩之事あるよし。実ニ致方なき次第、復タ幾千幾万之損亡なるべし。扱々困入たる事共ニ御座候³¹⁾。

福澤は、〔1〕において、今後の九鬼家の資産運用を担うのは白洲以外には誰もいないとの認識を示し、次の〔2〕において、現在の九鬼家の資産形成のきっかけを作ったのは白洲本人であると指摘している。それ故に、隆義の資産運用について、遠慮なく忠告するように述べているのであるが、そうせざるを得ない原因は、〔3〕「近来ハ旧痾再発」「復タ幾千幾万之損亡」とあるように、隆義による資産運用の失敗にあったようである。

その一方で、九鬼家では、明治10(1877)年頃迄において積極的投資が確認され、結果として、九鬼家が「小藩第二の資産規模」にまで成長した、という事実をみれば³²⁾、志摩三商会の設立当初における白洲の果たした役割の大きさを想像させてくれる。

31) 書簡番号1426 慶應義塾編『福澤論吉書簡集 第六巻』(岩波書店、2001年) 202~203頁。

32) 千田稔「華族資本の成立・展開——一般的考察——」(『社会経済史学』52巻5号、1986年) 7頁の第2表および12頁。

（2）理財通小寺泰次郎との連携関係

次に、白洲とともに志摩三商会の設立に参加し、後に独立して成功し、その子の地租納入額において、旧主九鬼家を上回るに至る小寺康次郎という人物との関係に注目したい。

なぜなら、維新时期における白洲の一連の活動は、文久期の藩政改革なかでも郷方制の改革がその起点であると考えられ、それ以来一貫して、小寺との連携関係を基本としているからである。

以下、三田市の近世・近代史研究者中谷一正氏の指摘である。

白洲の廃藩後における家宰的役割の起源を考えるうえで注目すべきだろう。

文久二年御沙汰の次に文久改革の内容としてあげるべきものに郷方制の改革がある。実際面に於て具体的に如何なる程度に効果をあげたか不明であるが、明治期に至って白洲退蔵が維新改革の推進の中心となった素地はこの郷方制の改革であった³³⁾

小寺は、まさにこの郷方制の改革を契機として白洲と連携するに至り、その後、その活躍する分野を拡げていくのである。

以下、小寺の略歴（廃藩置県以前とそれ以後に分けて記載）を示しておく。

小寺泰次郎 天保7=1836～明治38=1906

泰次郎は天保7年3月8日、三田藩の郷方弥五太夫の二男として生まれた³⁴⁾。安政6（1859）年、父の役職を世襲して、8石2人扶持の南郷11ヶ村の郷方となる。

当初は奉行鈴木謹次郎の傘下であったが、文久改革の一環として元治元（1864）年に白洲退蔵が南郷預りに就いてから頭角を表わす。後に、南郷諸村の溜池の改築・新築を行い、水田を増加して旱害を除くことに成功する。慶応元（1865）年、藩主隆義は人事刷新として、白洲を起用して執政とし、無足の泰次郎を抜擢して藩財政を担当させる。明治2（1869）年、役替えによって弁事（以前の勘定所）筆頭に就任し、藩財政を支配する。それと同時に、白洲は大参事に就任する。白洲を補佐して藩有山林を売却する等、藩債の整理に尽力する。

廃藩置県以後

明治6（1873）年、隆義・白洲らとともに、輸入商社「志摩三商会」を神戸栄町に開業する。数年後に独立して貸金業をはじめ土地の買占め等に専念する。後に神戸で最も富裕な地主となる。その後、区会議員・市会議員・県会議員等、一貫して地方の公職に就いた。明治38年1月29日、70歳にて没する。

33) 中谷一正「幕末政局と白洲退蔵——三田藩の藩政改革——」（『兵庫史学』第57号、神戸大学、1971年）31頁。中谷氏によれば、この郷方制の改革とは、「文久改革に当り、白洲自ら南郷支配の儘、郡奉行として、他の代官所をも支配し、事実上の郷方総裁として、年貢増収面を中心とした農民支配に格段の効果を生み出し」た「財政難打開の根本策」であった。

34) 小寺泰次郎の地位・役職および事蹟については、三田市立図書館蔵の「三田藩士族⑫ 小寺泰次郎」（『高田義久関係資料①』）を参照のこと。

三田市の近世史研究者高田義久氏が小寺に関して、「理財の才能は天稟というべき³⁵⁾」と指摘しているように、小寺は、社会経済史分野において理財通と呼ばれている、後の明治新政府の経済政策に携わる官僚層へと繋がっていく人々の一員であったと考えられる。

小寺は明治期において官僚ではなく議員であり、その行政レベルも国家ではなく地方ではある。しかしながら、自らの構想を政策へと反映させているという点においては、彼らと同じ立場であったといえる。これら理財通と呼ばれている人々による国家運営は、近代日本における官僚制合理主義の萌芽として位置づけられ、明治新政府の大蔵官僚による経済政策の構想との連続性が認められるのである³⁶⁾。

しかしながら、こうした理財通それも新興官僚としての小寺のような人物との連携は、白洲の事例においてのみ確認される性質のものではない。なぜなら、瀬戸内諸藩の藩政に関与した懐徳堂出身者においても、連携が見られる分野に差異があるものの、白洲と同様の事例が確認されるからである³⁷⁾。

5. 梅花社社主篠原小竹による白洲家との進学相談

前章で述べたように、儒者に見られる理財通との連携関係は、白洲に見られる小寺との連携関係の場合、幕末期のみならず維新时期にまで及んでいる。しかしながら、そうした連携関係は、懐徳堂出身者の社会的活動においても、それに類似した事例を指摘することができる。

こうした実践性を伴った人間関係の型は、連携する人物が儒者であるかどうかに関わらず、そうした型それ自体が、一般的時代傾向を示している可能性も考えられる。しかしながら、彼らがみな青年期において、大阪における「私塾」それも共通して「朱子学」を基本としている「私塾」に在籍していた経験を持つ以上、そこでの経験内容を明らかにすることも、一つの方法として考えられる（後述するように、白洲退蔵は、17歳の時に朱子学を基本とした大阪の私塾梅花社に入門している）。

そうした考察に入る前に、三田藩の藩学とされた朱子学と白洲家との関係について押えておく必要がある。なぜなら、たとえ三田藩の藩学が朱子学であったとしても、白洲退蔵に至るまで代々儒官であった白洲家は、直ちに朱子学を全面的に信奉していたと言えないだろうし、白洲家に受け継がれた学術の実情が、白洲退蔵本人の教育歴にも反映されていた可能性が考えられるからである。

そこで、白洲退蔵に至るまでの白洲家代々の教育歴を概観してみよう³⁸⁾。

35) 三田市立図書館蔵の「三田藩士族②小寺泰次郎」（「高田義久関係資料①」）参照。

36) テツオ・ナジタ『明治維新の遺産——近代日本の政治抗争と知的緊張』（坂野潤治訳、中央公論社、1979年）19頁。

37) 懐徳堂出身者丸川松隠と勘定頭梶並林亮との連携については、「丸川松隠書状」十月三十日（古文書研究会編『梶並家文書 書状之部 式』御殿町センター鳳凰会、2001年）15頁～16頁参照。同じく懐徳堂出身者巖村南里と勘定奉行瀬山登との連携については、「湛甫新堀漫筆 後編」（香川県編『香川県史』第10巻 資料編 四国新聞社、1987年）589～591頁参照。

38) 白洲家代々の役職・地位については、三田市立図書館蔵の「三田藩九鬼家家臣由緒22 白洲家」（「高田義久関係資料①」）、「三田藩校年表」（三田市・三田市教育委員会主催『歴史講演会 九鬼とさんだ』）および高田義久「最後の藩主九鬼隆義とその時代」（『歴史と神戸』第49巻4号、神戸史学会、2010年）の第3章第1節「藩学・朱子学と白洲家」参照のこと。

白洲家代々の教育歴

元禄4（1691）年に初代文蔵良房が儒者役として三田藩に召抱えられて以来、その後の白洲家における教育機関は、儀太夫良幹（2代）、順治郎良弼（3代）に至るまで、林家の家塾に入門している。ちなみに、朱子学が三田藩の藩学となったのは、初代文蔵が三田に学問所を設置した元禄11（1698）年のことである。しかしながら、4代貞四郎敬勝になると、明和8（1771）、古文辞学に通じる京の宇井黙齋の家塾に入門している。したがって、白洲家は当時流行していた古文辞学に接近する姿勢を見せつつ、一貫して「私塾」すなわち民間の学問所に在籍していたことになる。ところが、これも当時の流行に合わせて、次の5代文五郎吉明は一転して、文化（1815）年、「官立学校」である昌平坂学問所の古賀精里に朱子学を学んでいる。6代退蔵吉温が父の教訓をうけて、精里の子古賀謹一郎に学んだのも、父文五郎吉明のこの時の縁によるものと考えられる。

こうして白洲家代々の教育歴を概観し、一家に受け継がれた学術の実情を推測すれば、5代文五郎吉明以来、白洲家は「私塾」とは縁遠いものとなってしまい、それに加えて、そもそも白洲家は代々、大阪の学術とは無縁であったようにさえ感じられる。

しかしながら、白洲退蔵本人の教育歴をみると、江戸の古賀謹一郎に入門するより以前に、大阪の篠崎小竹の「私塾」梅花社に入門している事実が確認される。ところが、これに関して、先行研究をみると、白洲におけるこの「私塾」での経験について考察しているものは全く見当たらない。

以下、近年公開にされた小寺家旧蔵の『小寺泰次郎翁歴伝』の一節であるが、この一節から推し量れば、白洲における梅花社での経験も軽視してはならないように考えられる。

白洲退蔵は篠崎小竹の塾に業を卒へて安政六未己年に帰藩したるの人なり安政六年は桜田の変起り軍艦奉行木村撰津守等米国より帰朝し又始て泰西諸邦に国使を派遣したる前年にして欧米五箇国と通商仮条約を締結したる翌年に当れり即ち横浜港を開き初て蚕糸を輸出したる年にして天下の浪士書生互に盟を求め盛んに時事を論議したるの時なりき随て白洲は大阪遊学中に於て幾多の政客志士と相交り意見を上下する機会を得其性亦機慧穎敏なりしを以て藩中の老輩に対し一頭角を抜きたる識見を有したるは謂ふ迄もなし隆義が白洲を抜擢したる所以のもの一に茲に存せり³⁹⁾

したがって、白洲が在籍した梅花社での経験内容を明らかにすることは十分意義があるだろう。しかしながら、史料上の制約があるため、その経験内容の全体を明らかにすることはできない。そこで、本稿では、間接的な手法ではあるが、梅花社社主篠崎小竹が白洲退蔵の父文五郎に宛てた書簡から、当時の梅花社の教育機関としてのあり方を明らかにしたい。それは、白洲の梅花社での経験の意義を窺う一つの材料とはなり得るだろう。

39) 小寺家旧蔵『小寺泰次郎翁歴伝』（三田市編『市史研究さんだ——第9号——』2007年）、112頁。『歴伝』稿本の翻刻・紹介は、第9号（2007年）、第11号（2009年）、第13号（2011年）に所載。

書簡が送られた年代は不明であるが、その書簡の内容から、白洲退蔵（幼名：純太郎）が大阪の梅花社に入門した17歳よりそれ以後のものであると思われる。

如来翰新年御同慶申納候、其後春寒未退候処御揃益々御清適之状、此度純太郎遣御様子ニ候事別して候一寸言上奉家人綜春來風邪ニ被惱候、当分存候前々より罷おして沐浴老後諸事委□□察可候べく候、然者純太郎儀ニ付□親臍被仰遣長樂被致談合以来□永々芸州被遊など至極可様存候べく候、児玉と申候□不存候後とも坂井百太郎ハ此迄面会且書通もいたし候、学力文章当時の山陽道之魁と被為且諸方より來学之徒も不少、殊の外世話いたし門人駉々と承り申候間此方へ御一決可為と被存候、夏頃までに膝下に経術研究武芸なども取交え身体も達者之被相成候様祈候事に御座候、江都ハ力も付候上でハ大都にて然其効相見被申候へば□ふゆの間芸州遊後々事可為と存候、夏頃迄に月日も有之事故又々其内御相談可下候べく、何分本人之志気次第之事故膝下にてても其処御勉勵可被仰付候僅父子ハ如仰御近辺之事故幾久敷御懇意□何ハ御相談可申候べく候間其内他藩之様子遠国熟風など皆有益之事と存候間西遊ハ必被命可候べく候、当時九州ニハ広瀬淡窓在豊後耳、此者門人多く就候も詩を主に書を教へ且学説も加候、一家之見有る老なり、主張被致候故貴藩之風と相違し候と存候や、右前後無次第候、若し申候へば同権読可被存候、御地製之陶器種々被贈下多奉存、皆々賞翫に供、右御答迄如此尚奉願水春之時作、恐々謹言

篠崎長左衛門⁴⁰⁾

書簡から、白洲の父文五郎が息子退蔵の教育を案じ、梅花社社主篠崎小竹に相談している様子がわかる。それに対する小竹の返答は、具体的な遊学先として、広瀬淡窓による豊後国の咸宜園や坂井虎山による安芸国の家塾を持ち出している。これは、瀬戸内において何らかの「私塾」間ネットワークが存在したことも予感させる。したがって、白洲の教育歴について言えば、江戸の古賀謹一郎のもとへの進学は、白洲家において既定の方針であったのではなく、数多くの遊学先があった上での選択そして決定であった可能性が考えられる。幕末期大阪における梅花社は、それだけ、人材の成長発展の可能性を秘めたハブ教育機関としての役割があったといえる。

おわりに

本稿では、宋代以後の中国における「書院」の発達と、それと同時並行して進展する士人の社会的実践性の成長を根拠として、近世日本における「書院」すなわち「私塾」の人材養成機関としての側面を明らかにしようとした。

そこで、考察する中心人物として、資金面において社会的実践性を発揮しやすい廃藩置県以後の華族層に焦点を当てた。その具体的人物は、ともに旧領地が摂津国である旧尼崎藩主櫻井忠興と旧三田藩主

40) 三田市立図書館蔵「篠崎長左衛門先生書簡」(『中谷一正近世関係資料③』)「書簡」は、1983年2月頃、中谷一正氏が白洲三子氏より借覧・筆写したもの。

九鬼隆義である。

忠興の場合、文久期に藤澤東暎が尾崎藩の賓師となり忠興を教導したこと、その子南岳が忠興死後に博愛社での事蹟を撰しているところからみて、廃藩置県以後の忠興の社会的活動には、泊園書院が何かしらの影響を与えていた可能性が強い。本稿では、博愛社設立前後の忠興の行動とそれに対する他者評価を明らかにしたが、忠興に見られた利害打算とは離れた自発的意思とは如何にして培われたのだろうか。ちなみに、忠興は泊園書院における最後の近世的教養人と言うべき世代に属する人物であった。

一方、隆義の場合、忠興において確認される「私塾」に在籍した経歴は見られない（福澤との個人的関係によって慶應義塾出身者との接触は見られるが、本稿で問題としているのは、あくまで儒学の学問・教育を基本とした「書院」としての「私塾」であるため、考察の対象としていない）。しかしながら、幕末維新时期における隆義のブレンとして活動し、九鬼家の資産形成に寄与した白洲退蔵という人物に視点を移せば、文久期の郷方制の改革以来の連携関係、すなわち儒者白洲と理財通小寺との連携によって主君の活動を支える人間関係の型それ自体は、白洲よりも前の世代の懐徳堂出身者にも見られたものである。

次に、白洲の教育歴を見れば、「官立学校」である昌平坂学問所に入門する前に、大阪の「私塾」である梅花社に入門していることが確認される。小寺旧蔵の伝記を見れば、ここでの経験こそが、その後の白洲の社会的活動の土台となったと言わんばかりである。それでは、そこでの経験内容をより詳しく知りたいところだが、史料上の制約から困難であった。しかしながら、梅花社社主篠崎小竹による白洲退蔵の父との教育相談からは、多様な遊学先を持つハブ教育機関としての学社の役割が窺われ、瀬戸内の「私塾」間ネットワークの存在をも予感させた。

このように、本稿での論旨は多岐に渡り、取り上げた事項も様々である。いずれにしても、泊園書院・懐徳堂・梅花社の出身者による活動の実態把握が大半となってしまう、彼らの活動と彼らの「私塾」での経験とを繋ぐ回路（例えば、書簡に見る師弟関係の継続や日記に見る理念性の継承など）を明らかにできなかった。今後の課題としたい。

しかしながら、こうして、大阪という地域に限って幕末維新时期の「私塾」の出身者の動向をみれば、その社会的実践性の性質に異同はあるものの、それぞれ時代特有の課題解決へと向かう、という共通点があるように思われる。はじめに述べたように、明治6年の開業後の泊園書院と慶應義塾の経営状況をみれば、中央における「私塾」のあり方と大阪におけるそれとは異なるものであった可能性も十分に考えられる。今後、大阪を含めた日本における「私塾」の人材養成機関としての側面を一層明らかにすることを期したい。